寄稿

未来へのきざし

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科　教授　蟹江　憲史

1 はじめに

ＳＤＧｓにとっての2024年は、新たな幕開けを感じさせるような年となった。

９月の第79回国連総会の際に開催された「未来サミット」での決定事項を見ることで、この意味はよくわかるだろう。元々2023年に開催された「ＳＤＧサミット」と同時開催を予定していたものの、一年に二つの課題を同時に取り上げるのは負担が大きいという理由で一年先送りにされた「未来サミット」であったが、グテーレス事務総長の肝いりで開催されたという点に変わりはない。これから先、未来へ向けて国連と世界がどうあるべきかを議論し、コンセンサスを得ることで、規範作りをしていこうという国連の取り組みである。

サミットでは三つの大きな決定があった。「未来のための協定」と、それに付随する二つの決定、「グローバル・デジタルコンパクト」及び「将来世代に関する宣言」である。これらの決定事項には、今後の世界のあり方や方向性を示す事柄が豊富に盛り込まれている。残り５年と迫ったＳＤＧｓの先には何があり、どのように進めるのか、この５年間でのＳＤＧｓ加速に向けて何が必要で、そのためには何が、そして誰がカギとなるのか、といった事柄である。

現在の世界では、分断と不安が強調される。戦争下にいる人口は、第二次世界大戦後最大となっており、ウクライナやガザでの戦争は悲惨を極める。アメリカ大統領選挙では、超大国アメリカの分断を浮き彫りにし、過激な言動や他者への攻撃が当たり前のように行われ、さらにはこれに便乗しようとする人々のありさまが明らかとなっていった。その背景には格差拡大や人々の不安や不満があるとはいえ、ネット環境下で顔の見えなくなったとたんに、そうした不安や不満が露骨に表面化し攻撃性を増す現状も浮き彫りにしていった。中国とアメリカの対立、ロシアと欧州の対立など、とかく対立が目立つようになってきているようにも感じる。

こうした分断の中にあっても、共有しうる未来があるというのは希望の光でもある。その視点から過去に目を向けると、分断にさえ届かない状況があったこともわかる。例えばジェンダー。ジェンダー平等を訴え、妊娠中絶の権利を認めるか否かというのは、アメリカ大統領選挙でも重要な論点になった。明らかな分断の一つである。しかし、過去に目をやると、ようやくこうした点が論点となり、分断、つまり50－50の状況になってきたとみることもできよう。弱かった勢力が力をつけ、意見を二分するところまできた、というわけである。同様の状況はエネルギーでもいえよう。再生可能エネルギー産業と、化石燃料による石炭石油産業と、投資状況などを見ても、情勢が変化してきているとみることもできる。後者を応援し、掘って掘って掘りまくろうというトランプ大統領の主張がなぜ起きるのかを考えると、前者の勢力が増してきて危機感を持っているからに他ならない。

こうした事例はまだまだあるが、要するに、分断というのは、時代の境い目、新たな動きの胎動とみることもできよう。文学者である私の父は、変革期にある中世の文学の中に、変革がどのように起こるのかの動きを見ていた。徒然草155段は次のように謳う。

下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり

落葉というのは、まず葉が落ちて、そのあとに芽が出てくるのではない。下から芽ぐみが兆す力にこらえきれずに、古い葉が落ちるのだという。保元物語や平治物語は、貴族社会から武士の社会へむけて、その後700年続く大変革の時代を描いているが、そこにも下から芽ぐみが出てきて、じわじわと勢力が変化する様子が描かれるというのである。

この視点から今の「分断」状況をみれば、そして、未来に関して出てきた規範の視点から見れば、分断は新たな変化へのきざしとみることはできないだろうか。トランプ政権の発足した今だからこそ、冷静になって科学の声を聴き、未来の方向性と、今の分断の根底に流れる動向をみていく必要がある。

本稿はこのような視点に立って、2024年におけるＳＤＧｓの胎動を振り返るとともに、2025年へ向けた期待を述べていきたい。

2 未来のための協定

「未来のための協定」は、全文に引き続き、56項目にわたって行動（Action）を喚起する文書であり、その内容は起こすべき行動ごとに文書が成り立っている。協定が採択された９月の国連総会に先立ちＳＤＧｓの評価を行った2024年の国連事務総長報告を見ると、グローバル指標を通じて得られたＳＤＧｓ達成度は「17％」だった。このまま進捗した場合に、達成できるターゲットは17％にとどまるということである。したがって、実施の加速が喫緊に必要となる事から、協定でもこれが主なテーマとなっていった。

協定は以下の五つの大きな分類で整理されている。

- 持続可能な開発と開発のための資金：アクション１～12
- 国際平和と安全保障：アクション13～27
- 科学、技術とイノベーション及びデジタル協力：アクション28～33
- 若者と将来世代：アクション34～37
- グローバルガバナンスの変革：アクション38～56

最初の「持続可能な開発と開発のための資金」では、特にアクション12に注目したい。ここでは、ＳＤＧｓ[illegible]と結合した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の実施の加速化と、2030年を超えて、新たなチャレンジを含む持続可能な開発のための行動の必要性が記載されている。とりわけ注目[illegible]国連[illegible]ハイレベル政治フォーラム（HLPF）において、2030年まで、そしてその先に、国連における活動の中心事項としての持続可能な開発をどのように進め[illegible]

現在のＳＤＧｓの目標年限は2030年と設定されており、その先にＳＤＧｓがどのようになっていくのかが、これまでに国連で示され[illegible]への協定」の中で初めて、2027年に検討することが明らかとなったのである。2027年の「国連総会の下で実施されるハイレベル政治フォーラム（ＨＬＰＦ）」と[illegible]る。国連では通常７月に開催されるＨＬＰＦで、ＳＤＧｓの進捗を評価することが決まっているが、１年に一度はこのフォーラムを[illegible]

以降は会員専用ページにて公開しております。
ご覧頂くには、入会手続き後、会員専用ページより
アクセスをお願いします。
ご入会はこちらから
（入力は数分で終わります）
会員の方はこちらから